

目 次

			~-	~
Ι	はじ	: めに		1
${\rm I\hspace{1em}I}$	日本	本列島ではいつ頃から鉄製品を使うようになったか		4
Ш	日本	対島での鉄・鉄器生産はいつどこではじまったか		10
		製鉄遺構		11
		鉄器製造工場		14
\mathbf{N}	实道	恒 町内では人と鉄がどう係わってきたか		16
	(1)	鉄の原料はどこで調達したか		16
		製鉄の原料		16
		宍道町内の砂鉄		17
	(2)	燃料の調達はどうしていたか		21
		製鉄用木炭		21
		炭焼き窯		22
	(3)	鉄と鉄器はどんな所でどのようにして生産したか		25
		鉄滓の散布地		25
		鉄器製造の工房		32
	(4)	鉄の神様はちょっと変っている		44
		たたらひめの登場		44
		金屋子神の降臨		46
		神様の好き嫌い		48
V	おれ	つりに		51
m ===	; <i>477=</i> >	٠ ٠		
	語解診			
宏老	171	た主た文献		58

I はじめに

私たちがいつも何気なく使用している鉄は、いったいいつ、どこで、 誰が作りはじめたのでしょうか。

今から約5500年以上前の、西アジアのサマッラ遺跡(イラク)で出土した鉄片が、人工鉄としては一番古いと言われているようです。また、ヒッタイト帝国(紀元前1700~1200年頃)があった地(現在のトルコ)では、先住民のハッテイ人が鉄をつくりはじめ、それをヒッタイトが独占して強大な国を建設したとも言われています。ヒッタイト帝国の首都ボガズキョイの近くにある、アラジャ・ヒュク13王墓(前期青銅器時代)のK号墳(紀元前2300年頃)から豪華な黄金で飾られ

た鉄製短剣が発見され、それと前後した時 期の墓からも鉄器の破片が出土していま す。この鉄器の材料には隕鉄が使われてい ます。

どのような経路で日本列島へ鉄が伝わったかはわかりませんが、東アジアの方に向かってはトルコ系遊牧民が伝えたと言います。トルコ系突厥族から靼韃人があらわれ搭搭児とよばれました。タタールには猛火図1ハッテする場面の想という意味があるということです。日本では、砂鉄による製鉄を「たたら」とも言い文化をさぐるますが、その語源としてタタールには興味峰書店)より



図1 ハッティ人が隕鉄を鍛造する場面の想像図(背景トルコ・ボアズカーレ遺跡を想定) 隕鉄は17ページ「図説 日本の文化をさぐる37 鉄の文化」(小峰書店)より

深いものがあります。また、たたらは人工的な送風装置であるふい ごからきたとも言われています。 古代の文献では、「踏鞴」や「 鞴」と書いて、「たたら」と読ん

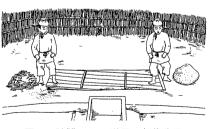


図2 踏鞴による送風の想像復元 でいます。後には、製鉄炉を「鑪」「月刊文化財平成8年9月号掲載報文より(部分) (鈩) と書いてたたらと読んだようです。

 部分と合流し、神西湖を経て日本海へ流れ出ます。飯石小川は、現在の 三力屋川を経て斐伊川と合流し、これも神西湖から日本海へ流れ出ます。その昔、斐伊川は現在の宍道湖を通らないで日本海の方へ流れていました。以上の諸の郷とは、その直前に書いてある仁多郡の郷のことです。 デャー時代には、砂鉄で作られた鉄が出雲地方の特産物になっていたと考えてもよいと思います。

この出雲地方では、たたら製鉄というと奥出雲から安来方面だけのことのように思われがちですが、そうではありません。宍道湖岸のこの地でもかつてはたたら製鉄が行われていたのです。野山を歩くと、かなくそと呼ばれる鉄滓を見つけることがあります。宍道町内、特に町域の南側地区で生活してこられた年配の方にはご存知の方が多いと思います。宍道町内の地名でよくみられる、タタラ、カンナ、カナナ、カナヤゴ、キンゴ、カジなどは製鉄あるいは鉄製品製造に関係がありそうです。このように地名や地形を考慮にいれながら、鉄にかかわる歴史について考えるのも興味深いと思います。

以下、宍道町における鉄と人々との係わりの歴史について、島根県 各地や全国の例を参考にしながら、紹介したいと思います。

専門的な言葉があり、少し読みにくいかもしれませんので、用語解説 (P55) をつけておきます。絵や写真も多く使いますので、読みにくいところは、読みとばしていただいても結構です。

Ⅱ 日本列島ではいつ頃から鉄製品を使うようになったか

学校で使う教科書には、弥生時代に大陸から金属器が伝えられたと説かれています。九州では、弥生時代の前期(研究者によっては縄文時代終末)に少数の輸入鉄製工具がみられ、次第に北の方へ鉄器の使用が伝わっていったようです。

島根県内でも次の表のようにかなりの遺跡で鉄器が出土しています。でも、当時はかなり貴重品でありだれでも持てるといったものではありませんでした。斐川町の史跡荒神谷遺跡発見の銅剣や銅鐸・銅ケシンが、加茂町の史跡加茂岩倉遺跡発見の銅鐸のような青銅器ほどの希少価値はないとしても、特定の人物の持ち物であったか村の共同のものと考える方がよいでしょう。青銅器の多くは祭りの道具か村のシンボルですが、鉄器の多くは実用品と考えてもよいと思います。

今のところ、県内の最も古い鉄器は、松江市西川津遺跡出土の弥生時代中期の鉄斧(鉄製の斧)です。どこで作ったかわかりませんが 3 造製品です。このころは、銅を溶かして銅鐸などを造る技術はありましたが、まだ鉄を溶かす鋳造技術は伝わっていなかったようです。おそらく韓半島からの輸入品と思われます。出土したのは、割れた破片ですが、当時の日本列島では割れた斧を研いだりしてリサイクル使用している例が多くあります。この鉄斧は研いでありませんが、研ぐ前だったのかもしれません。

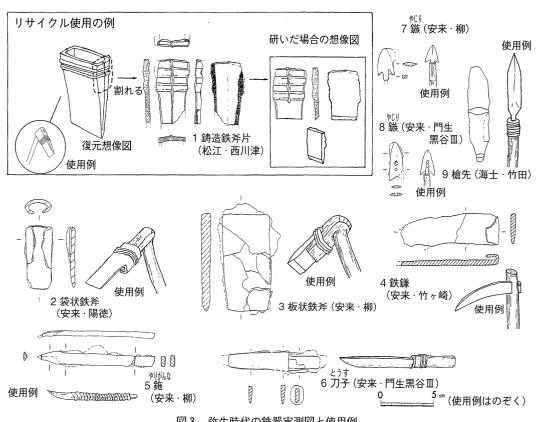
弥生時代後期は、青銅器を中心にした祭りが行われなくなる時期で もあります。特に、終末期の出雲地方では四隅突出型境 丘 墓と呼ば

表1 島根県内の鉄器が出土した弥生時代遺跡一覧

番号	遺跡名	所 在 地	種 類	時期	出 土 遺 物 (鉄 器)	掲載図面
1	西川津遺跡	松江·西川 津	貝塚貝層	中期	鋳造鉄斧片 1	3 - 1
2	門遺跡	飯石・頓原	竪穴住居跡 SI 33	後期前葉	鉄鏃 or 鉄片 1、 鎌 1	
3	波来浜遺跡	江津・後地	墳墓2号墳	後期前葉	鉄鏃 3	
4	門生黒谷Ⅲ 遺跡	安来・門生	竪穴住居跡02	後期前葉	不明鉄器 1	
5	門生黒谷Ⅲ 遺跡	安来・門生	加工段 SI 08	後期前葉	鉄鏃 1	3 - 8
6	門生黒谷Ⅲ 遺跡	安来・門生	加工段 SI 12	後期前葉	鉄鏃 1	
7	山守免遺跡	八東・宍道	竪穴住居跡	後期前葉	鉄鎌1	
8	門生黒谷 II 遺跡	安来・門生	加工段 SI 03	後期前葉	鉄鏃 1	
9	門生黒谷Ⅲ 遺跡	安来・門生	竪穴住居跡 SI 09	後期前葉	刀子 2 、不明鉄器 2	3 - 6
10	竹田遺跡	隠岐・海士	表面採集	後期前葉	槍先1	3 - 9
11	勝負遺跡	松江·東津 田	竪穴住居跡 SI 03	後期前葉	板状鉄斧?1	
12	廻田遺跡	松江·秋鹿	竪穴住居跡 SI 01	後期前葉	不明鉄器 2	
13	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 02	後期前葉	不明鉄器 1	
14	門遺跡	飯石·頓原	竪穴住居跡 SI 34	後期前葉	断面方形の棒状鉄 製品 1	
15	門生黒谷Ⅲ 遺跡	安来・門生	竪穴住居跡SD01	後期中葉	不明鉄器 1	
16	史跡西谷墳 墓群3号墓	出雲・大津	第4主体 四隅突 出型墳丘墓	後期中葉	鉄剣 1	
17	上野Ⅱ遺跡	八東·宍道	竪穴建物跡、鍛冶 工房	後期中葉~	鋳造鉄斧、袋状鉄 斧、板状鉄斧、袋状 子、鏨、製品、 片、未直刀、棒状 、端、 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 数 は る 、 数 場 、 端 、 端 、 は 、 様 、 様 、 端 、 は 、 は 、 は 、 は 、 、 、 、 を は 、 、 、 、 、 を 、 と 、 と 、 と 、 と 、 と 、 と 、 と	
18	叶谷遺跡	安来・早田	1号住居跡	後期中葉	不明鉄器1	
19	柳遺跡	安来・荒島	加工段22	後期中葉	鉄鎌?1	

番号	遺跡名	所在地	種 類	時期	出土遺物 (鉄器)	掲載図面
20	中山国竹遺跡	仁多・横田	集落跡跡	後期中葉	板状鉄斧 2	
21	鳥井南遺跡	大田・鳥井	竪穴住居跡	後期中葉	鍬先 1	
22	平所遺跡	松江・矢田	玉作工房跡他	後期中葉	鑿24、ケンガネ8、 錐66、他29、計127	
23	平所遺跡	松江・矢田	1 号住居跡	後期中葉	板状鉄器1	
24	柳遺跡	安来・荒島	住居跡 SI 05	後期中葉	鉄鏃 1	3 - 7
25	柳遺跡	安来・荒島	加工段2	後期中葉	鉄鏃 1	
26	柳遺跡	安来・荒島	加工段8	後期中葉	不明鉄器 1	
27	柳遺跡	安来・荒島	加工段23	後期中葉	板状鉄斧1	3 - 3
28	柳遺跡	安来・荒島	加工段25	後期中葉	鉄製品の茎部分? 1	
29	森Ⅲ遺跡	飯石·頓原	集落跡 SI 08	後期中葉	鉄鏃数点	
30	折原上堤東 遺跡	八東・八雲	竪穴住居跡 SI 07	後期中葉	不明鉄器 1	
31	陽徳遺跡	安来・門生	竪穴住居跡 SI 04	後期末	袋状鉄斧1、板状 鉄斧1	3 - 2
32	柳遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 01	後期末	刀子 or 鉇 1	
33	柳遺跡	安来・荒島	加工段34	後期末	鉇 1	
34	柳遺跡	安来・荒島	加工段38	後期末	鉇 1	3 - 5
35	柳遺跡	安来・荒島	階段状遺構 土器 溜り	後期末	不明鉄器 1	
36	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	土壙SK01墳墓?	後期末	袋状鉄斧 1	
37	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	土壙SK02	後期末	袋状鉄斧 1 、三角 形鉄片 1	
38	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	加工段04~06	後期末	片刃鍛造鉄斧1、 鉄鎌1、鉄鏃1	3 - 4
39	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	加工段07	後期末	錐1、不明鉄器1	
40	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 01	後期末	袋状鉄斧 1	
41	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 04	後期末	刀子1、鉄鏃1	
42	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 05	後期末	鏨 or 鉇 1	

番号	遺跡名	所在地	種 類	時期	出土遺物 (鉄器)	掲載図面
43	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 09	後期末	鉄片(原材料?) 鉇1	
44	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 12	後期末	鉇 1	
45	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 14	後期末	鉇(木質残存)1、 片刃鉄片1	
46	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 15	後期末	平基式鉄鏃 1	
47	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	竪穴住居跡 SI 17	後期末	板状鉄斧1、袋状 鉄斧1	
48	竹ヶ崎遺跡	安来・荒島	加工段19	後期末	棒状鉄片(茎 or 鉄素材?)1	
49	塩津山遺跡	安来・荒島	加工段1	後期末	鉄鏃 2	
50	岩屋北口遺 跡	安来・佐久 保	竪穴住居跡 SI 01	後期末	鉄鏃 1	
51	森Ⅱ遺跡	飯石・頓原	集落跡 SI 01	後期末	鉄鏃 3	
52	史跡仲仙寺 古墳群宮山 支群	安来·西赤 江	4号墓 四隅突出 型墳丘墓	後期末	鉄刀1	
53	的場尻遺跡	飯石・頓原	竪穴住居跡 SI 01	後期末	鉄鏃1、摘み鎌1、 不明鉄器1	
54	沖丈遺跡	邑智・石見	竪穴住居跡	後期末	鉄斧、刀子、鉇、 棒状鉄素材等約100	
55	門遺跡	飯石・頓原	竪穴住居跡 SI 24	後期末	鉄板切屑 1	
56	南講武草田 遺跡	八束・鹿島	土器溜りD-4	後期末	ヤス3	
57	板屋Ⅲ遺跡	飯石・頓原	11 or 12号住居跡	後期末か	板状鉄斧1、鉄鎌 1	
58	前立山遺跡	鹿足・六日 市	竪穴住居跡 SI 11	後期末	鉄鎌1	
59	野田西遺跡	邑智·瑞穂	竪穴住居跡	後期	鉄斧、刀子	
60	平田遺跡	大原・木次	竪穴建物跡、鍛冶 炉	後期末~ 古墳初	鉄族、鉄斧、鉇、 鏨状鉄製品、鉄片 36	



弥生時代の鉄器実測図と使用例

れる壮大な墓が出現るようになります。祭りの形が変わる時期であり、社会の様子も大きく変化したと考えられます。この頃から、多くの遺跡で鉄器が出土しその種類も多くなり、鍛冶遺構の発見も増えています。鉄器を作ることを専門とする人々の集団があったようです。鉄器は青銅器に比べて腐蝕しやすく残りにくいものですが、それでも多くの遺跡から出土しています。木を切る斧、木を削る***666662** への遺跡から出土しています。木を切る斧、木を削る***666662** へを繋、稲刈りや草刈りに用いる鎌、武器または狩猟用具と考えられる弓矢の**5666662** を始めたど、その他があります。宍道町では、才地区の山守党遺跡(後期前葉)(図13-13)で、鉄鎌の破片が、佐々布地区の上野Ⅱ遺跡(後期中葉から末期)(図13-17)からは、多量の鉄器が出土し注目を浴びました。今のところ、島根県内の弥生時代遺跡の中では松江市の空でが遺跡、石見町の満たず。遺跡に次いで多くの鉄器を出土しています。出土した鉄器の種類も多く、上に紹介した以外の道具とか武器、

板状や棒状の鉄素材(鉄器を作るための材料)などが含まれています。

上野 II 遺跡の人々は当時のハイテクノロジーを率先して取り入れた最先端を行く人々だったのでしょう。後の項でまたふれることにします。仁多郡横田町の中山国竹遺跡(後期末)出土の板状鉄斧は、磁鉄鉱を始原料とする鋼を利用しているというこ

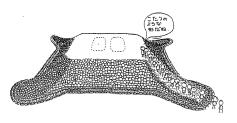


図4 西谷3号墓復元図 パンフレット「四隅突出型墳丘墓 西谷3号墓|(出雲市教育委員会)より

とです。

荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡などから想像されるまじないなどの呪 術師的な権威者が統率していた時代から、出雲市の史跡西谷墳墓群 3号墓のような四隅突出型墳丘墓が築かれる時代に移るとともに社会 のようすも変化したようです。四隅突出型墳丘墓に葬られた人物は、 鉄製武器で武装した集団を率い、絶大な権力をもって君臨していたの でしょう。そして、やがて権力者が古墳を築く時代へと移っていくの です。その背景として、稲作や鍛冶をはじめとする様々な産業の飛躍 的な発展があったものと思われます。

Ⅲ 日本列島での鉄・鉄器生産は いつ どこで はじまったか

弥生時代前期から鉄器を使っていたのですから、この時代には鉄も 作っていたと考えるのが自然ですが、製鉄産業のはじまりについては

謎が多く、まだわかっていません。弥生時代の各種遺跡から出土する鉄器の素材や鍛冶跡出土の鉄素材について、どこでどの

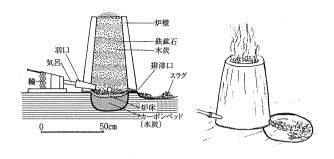


図5 小丸遺跡製鉄炉復元想定図 左「新版古代の日本④中国·四国」(角川書店)より 右·筆者

ようにして作られたかなど詳しいことはまだ解明されていませんが、 少しずつヒントになりそうなことがわかってきつつあります。 以下、略述しましょう。

製鉄遺構 広島県の小丸遺跡で発掘された製鉄炉は 弥生時代後期 に含マンガン鉄鉱石を製錬した円筒形炉(シャフト炉)だとする説も あります。しかし、 弥生時代という占についてはまだ認められていた いようです。弥生時代の鉄素材に関しては韓半島や中国から輸入され たとする説が有力です。ところが 韓国釜山市萊城遺跡の鍛冶遺構か ら出土する土器は全体の94パーセントが北部九州の弥生時代中期前半 の土器だといいます。萊城遺跡の例とか、韓国忠清北道鑓川郡石嶋田 遺跡で3~4世紀の製錬炉(製鉄炉)と砂鉄が確認されたということ から、当時の韓半島と日本列島の間を鉄づくりの技術者が行き来して いたと、想像したくなります。邑智郡石見町の湯谷悪谷遺跡の弥生時 代後期の竪穴式住居跡から出土した鉄滓は、製鉄のときにできるもの と言われています。弥生時代後期に石見地方の山間部で製鉄が行われ ていた可能性がでてきました。また、福岡県の潤崎遺跡(5世紀後 半、古墳時代)出土の鉄滓も、分析結果では製鉄の際に生ずるもので あるということです。しかし、いずれも製鉄遺構は検出されていませ ん。今のところ、確かな遺構が認められる製鉄遺跡で一番古いのは6 世紀後半(古墳時代)のものといえそうです。

島根県内で最も古いとされる製鉄遺構に、飯石郡掛合町の羽森第3 遺跡や邑智郡瑞穂町の今佐屋山遺跡があります。いずれも6~7世紀

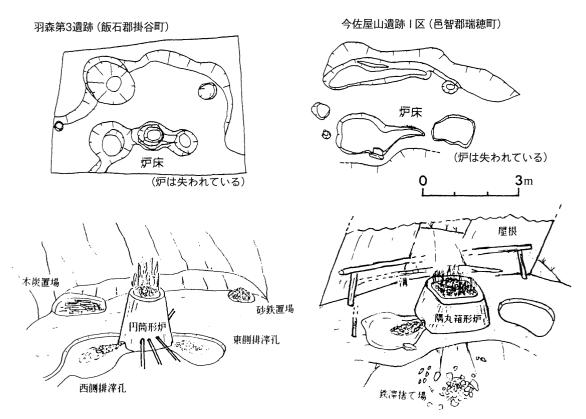


図6 発掘された古代の製鉄遺跡遺構図(上)と復元想定図(下)

のもので、前者は円筒形炉(シャフト炉)、後者は箱形炉と推定されています。これらの遺跡は、山の斜面をL字状にカットしてその平らな面に築かれた簡単な構造をもつものです。どちらも砂鉄を原料とした製鉄遺跡ですが、発掘で現れたのは、炉の下の部分にあたる地下構造などです。鉄をつくる炉の部分は、鉄のかたまりを取り出す時に壊されてしまいますので炉の完全な形は残りません。たたら製鉄では、湿気を大変嫌います。砂鉄を溶かすのに約1300度の温度が必要ですが、地下の湿気が上がると炉内の温度を十分に上げることができなくなります。また炉床のつくり具合によっては、操業中に水蒸気爆発を起こすことがあるので、炉の地下構造にとても気を配るのです。炉内の温

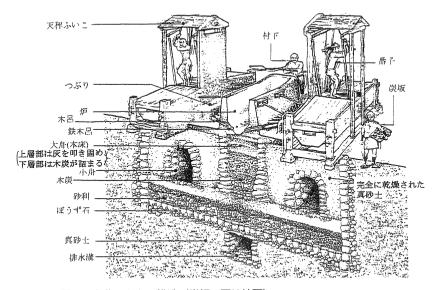


図7 永代たたらの構造(炭坂の下は地下) 「図説日本の文化をさぐる7 鉄の文化」(小峰書店)より(一部修正)

度を上げるためには送風も重要です。羽森第3遺跡(図6)の炉壁には木呂穴があったようです。ふいごと呼ばれる送風装置があったと考えてよいでしょう。最初の頃の製鉄遺構は、山の斜面をカットしてつくられた平らな面に築かれています。自然の風力を得やすくするためにでしょうか。どうしてなのかわかりません。古い時代の製鉄遺構として、となりの玉湯町では、玉ノ宮地区から7世紀末のものと9世紀末のものと推定される製鉄遺構の存在が知られています。

たたらの構造は、長い歴史とともに簡単なものから複雑なものへと変化していきます。江戸時代半ば以降になると、特に地下構造が工夫され複雑なものが築かれるようになります。(図7)また、この頃から天祥ふいごが登場しました。強力な送風装置を使用することにより炉内の温度を上げることが容易になったことも特筆すべきことです。大きな鉄のかたまりを小さく砕くことが可能になり、大きな鉄のかたまりをつくる技術の開発にともなう変化と考えられます。

鉄器製造工場 鉄素材を鍛え鉄器を作る鍛冶遺構は、かなり発見され、弥生時代中期末のものを最古とし、その分布は九州から関東にまで及びますが、東へいくほど極端に減少する傾向にあるといいます。 鍛冶遺構では、さきにふれた板状鉄素材、鉄鋌や鉄塊などの素材加工ばかりでなく、製鉄場でできたばかりの鉄を脱炭したりさらに鍛えて鉄として仕上げたり、その鉄を工具や武器などの鉄器にするための加工も行っています。

島根県内での鉄器生産を行った最も古い鍛冶遺構としては、前に紹

介した邑智郡石見町の湯答整谷遺跡で弥生時代後期、安来市の*が遺跡で弥生時代後期後半~後期末または古墳時代中期と推定される鍛冶炉が発見されています。湯谷悪谷遺跡では、製鉄滓(チタン磁鉄鉱)とともに鍛冶滓(大鍛冶)も出土し、柳遺跡では、鉄滓、碗形滓(鉱石系)、鍛造剥片、*粒**状*滓、勃白溶解物、炉壁小片が出土しています。どちらの遺跡も、鉱石系の鉄滓が出土している点が注目されます。先に述べましたように、横田町の守山歯竹遺跡出土の鉄斧は磁鉄鉱で作られているとのことです。それぞれの地域間での交流があったと想像するのも楽しいかもしれません。

宍道町の上野Ⅱ遺跡には、弥生時代後期の鉄器製造工場があったと 考えられています。詳しい様子については後でふれることにします。

古墳時代になると、鉄製品の普及も進み、各地の各種遺構から鉄器が出土します。宍道町内の古墳をはじめとする各遺跡からも鉄器が出土しています。鍛冶遺構の数もかなり増えてきます。もう、この時代になると、鉄は生活に欠かせないものになりつつあったと考えてよい

でしょう。島根県内の古墳 時代以降の遺跡から出土す る鉄滓は、砂鉄が原料となっているようです。

『日本書紀』の神功皇后 46年の記事に、音湾の背 古王が鉄鋌40枚を爾波移に

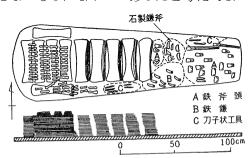


図8 奈良県ウワナベ 6 号墳の鉄鋋埋納状態 「図説日本の文化をさぐる7 鉄の文化」(小峰書店)より

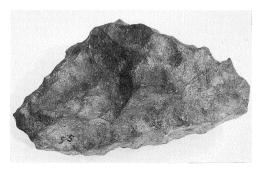
与えたとあります。また、同じ『日本書紀』の皇養 元年(642) 4月の記事に、百濟からの使いに鉄鋌を20枚与えたとあります。前者は韓半島製、後者は日本製と考えるのが適当と思われます。鉄鋌 (現在は、てっていと読んでいる) は鉄の延べ板のことで、もともとは韓半島から伝えられたものです。鉄器製造のための素材として考えられていましたが、最近はその大部分が、所有していることで威光と信望を示す滅信財として使われていると解釈されるようになっています。鉄鋌はその成分をみると、低炭素で日常利器の生産に適していないことや各地の出土状況等から、そのように考えられるようになりました。また、国産の鉄鋌もあるのではないか考えられるようになています。『日本書紀』の記事もそうした歴史の流れを反映しているのでしょうか。

№ 宍道町内では人と鉄がどう係わってきたか

前置きが長くなりましたが、これまでにわかった資料を中心に、宍 道町内における人々と鉄や鉄器生産とどのような係わりをもってきた か、その歴史を振り返ってみることにします。

(1) 鉄の原料はどこで調達したか

製鉄の原料 ヒッタイトや中国大陸などで出土する最も古い時代の 鉄製品は、宇宙から降ってきた隕鉄を使用しているということです。 宍道町の来待ストーンミュージアムに、アフリカのナミビアに降った 隕鉄(鉄質隕石)が展示されています。これは、本当に鉄のかたまりといった感じです。まず隕鉄の鍛造が行われ、次に鉄鉱石の製錬へと進歩し、製鉄技術が各



地に伝わるうちに一部の地 写真1 隕鉄(鉄質隕石)(来待ストーンミュージアム蔵) 域で砂鉄を原料とした製錬が行われるようになったのでしょう。先に紹介した石見町の湯谷悪谷遺跡、安来市の柳遺跡で出土した鉄滓は鉄鉱石が原料のようです。『盲本"霊"異記』には、「森"徳天皇の時代(764~770)に美祚国(岡山県)の英笛郡内にあった官営鉄山で坑道掘りの最中に落盤事故があったとの記事があります。鉄鉱石を鉱山で採掘していたことがわかります。古代から中世にかけての中国地方をみると、山陽側(備前、備中、備後)では鉄鉱石を原料とした製鉄遺構が発見されていますが、他の地域では砂鉄を原料とする製鉄が中心であったようです。これまで島根県内で検出された製鉄遺構は、砂鉄を原料とするもののようです。

宍道町内の砂鉄 町内の南側にあたる地域の地質図をみると、砂鉄を含む花崗岩地帯となっています。実際に磁石で砂鉄を採取することができます。来待川の砂からも微量ですが採取できますし、宍道湖岸河口付近の畑の砂地でも砂鉄を採取できます。町内の地名をみると、カンナ、カナナというのがあります。祖父堀、錖堀のように…ボリ

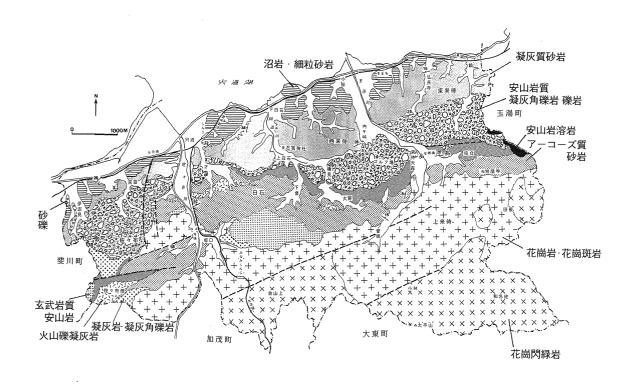


図9 宍道町の地質図 「宍道町が海だったころ」より

という地名も多く残っています。鉄穴流しの行われていた跡かもしれません。山を人の力で切り崩して、水で流し、沈殿した砂鉄を採取する方法を鉄穴流しと言います。かなりの重労働であり、危険な作業でもありました。

来待川の流れる平野部は沖積地であり、河口部が宍道湖に向かって 突き出ています。この平野がいつ頃から今のようになったのかはわか りませんが、簸川平野や安来平野のように、砂鉄をとるための鉄穴流 しが川の上流で行われ、多くの砂が流され堆積してできたのかもしれ ません。実際に他の地域で行われたような鉄穴流しの遺構はまだ発見 されていないので、安易に決めつけることは許されませんが、可能性 は大きいと思います。宍道町史史料編の地質編に、来待川流域(久戸)



図10 鉄穴流しのようす「日本山海名物図会」より

のボーリング調査結果が紹介されています。それによると、地表面下約1.8メートルあたりから約5.6メートルの岩盤直上まで、砂礫層が粘土質シルト層をはさんで堆積しています。また、他の沖積平野の地表下でも厚い砂の層がみられるところがあります。

奥出雲の鉄穴流しは、下流部に砂を堆積させ川の氾濫を起こしたり、湖を埋めたりするので、江戸時代の始めころ禁止されるという時期がありました。奥出雲の鉄穴場では、1トンの砂鉄を採取するのに約200トンの土砂が流されたそうです。その数字をそのままあてはめることはできませんが、参考にはなると思います。砂鉄に比べると土砂は比重が小さい(土砂の方が軽い)ので、流される土砂の量は採れる砂鉄の量の二百倍どころではなかったはずです。次の項で述べますが、たたらの操業でかなりの砂鉄を用いることになります。特に江戸時代の半ば以降は、中国山地の奥部でかなり大掛りな操業が何ヵ所も同時に並行して行われていたと考えられますので、流された砂は膨大なものだったと想像されます。また、鉄穴場となった山は、そっくりなくなるなど地形が大きく変化したりしています。

宍道町内で、製鉄のときに生ずる鉄滓が散布しているところはこの 花崗岩地帯に近いようです。製鉄場に近いところで砂鉄を採取する方 が経営上効率的です。きっと、近くで採取していたと思います。農閑 期などに山や川あるいは宍道湖岸で砂鉄を採っている人々の姿が目に 浮かぶようです。

(2) 燃料の調達はどうしていたか

製鉄用木炭 現代の製鉄所では、燃料として石炭から作られたコークスが使用されていますが、たたら製鉄や鍛冶には木炭が使われていたのです。

かつて「粉鉄七里に炭三里」という、言葉がありました。粉鉄(砂 鉄のこと)は28キロメートル、炭は12キロメートルの範囲内で調達し なさいということです。その範囲を超えると、採算があわなくなると いう教えです。それだけ、大量の木炭を消費するのです。昭和52年11 月18日から行われた、仁多郡構田町大呂の日刀保たたらでの操業で は、一代(三昼夜・約70時間)で2.0~2.5トン(平均の長さ2.7メー トル、幅1メートル、厚さ20センチメートル強)の紐をつくるのに、 砂鉄を約6.7トン、木炭を約10.7トン使用したということです。奥出 雲のたたら最盛期には、あるたたら場で1年に平均60代の操業が行わ れました。使った木炭は約810トンで、約60ヘクタールの山林が必要 だったと言います。樹齢約30年の木を使いますので、山林が元どおり になるまで30年かかることになります。仮に、たたら操業をずっと同 じ調子で続けようとすれば、一つのたたらに対して1800へクタール(町 歩)の山林が必要ということになります。今の時代の感覚では、樹木 の乱伐ということに結びつきやすくなりますが、当時は今よりもっと 山を管理することに熱心でしたから、鉄穴場と比べて山林の方はそな んに荒れるということはなかったと思います。宍道町内で行われてい たのは、小規模たたらですから、単純に比較はできませんが、それで も沢山の木炭が必要であったことは確かなようです。最近は家庭で炭を使うことが少なくなったので、若い人には炭を知らない人が多いと思います。たたら製鉄で使う炭は、大炭といい家庭用のものとは異なって、芯の方は炭化しきっていません。この炭は、煙をたくさん出すので家庭で使うことは困難です。なぜこんな炭を用いるかというと、燃焼中に出るガスも一緒に燃焼させて、より強い火力を得るためです。鍛冶場で使う炭は、小炭といい地面に掘られた穴に木を積んで点火し、土をかぶせて蒸し焼きにしたものが使われていました。火力が弱く炎の立つものを必要とするからです。

炭焼き窯 宍道町町内で、製鉄に関係すると思われる古代の炭焼き 窯の跡が発見されています。以下その様子を紹介しましょう。

[哲石芙蓉 I 遺跡](図13-12) 宍道町大字下倉で発見されました。これは、島根県教育委員会が行った中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内の調査で発見されました。同道川の左岸側にあたる丘陵斜面で発見されました。川をはさんで向かい側には石。営神社があります。丘陵突端付近の急斜面に並行してトンネル状に掘られ、「横口付製炭窯」と呼ばれています。焚き口、焼炭部、煙道、煙出し、作業面で構成されています。焚き口から煙り出しまでの長さは14メートルにおよぶ長いものです。作業面からトンネルに向かって横口(かき出し口)6口が開けられています。この形から、「やつめうなぎ」とも呼ばれています。焚き口は木を燃やしたり炭を取り出す部分、焼成部は炭を製造する部分、煙道と煙り出しは字のとおり焼成部からの排煙をする



図11 炭焼き風景想像図



写真 2 白石大谷 I 遺跡 横口付製炭窯 (島根県埋蔵文化財調査センター提供)

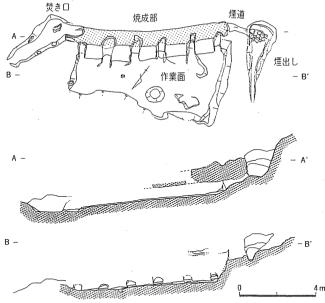


図12 白石大谷 I 遺跡 横口付製炭窯実測図「宍道町史」より

部分です。焚き口は作り直した痕跡があり、焼成部の天井は落盤していました。一度に大量の炭を生産する、たたら製鉄用のものとして築

かれたレ考えられています。レかりの玉湯町布志名大谷 II 遺跡でも 2 基の同じタイプの炭焼き窒が発見されています。布志名大谷Ⅱ遺跡の 場合、使われた年代を自然科学的な方法で測定をしたところ、2号室 跡が放射性炭素C14年代測定でAD705年 助磁気年代測定でAD660 +50年、1号筌跡が地磁気年代測定でAD650+40年という結果が出 ています。7世紀末から8世紀初頭にかけてのものということになり ます。1号窯跡の作業面から7~8世紀の十器が出土していて、おお かわこの頃に炭が焼かれていたと思われます。このタイプの窒跡は、 関東から、九州にかけて約150基確認されているとのことです。岡山 県から広島県東部で多く発見され、「吉備国」を中心に分布していま すが、山陰地方では、鳥取県で4例、鳥根県で2例3基(玉湯町と宍 道町)が知られているだけです。横口付製炭窯は、6世紀後半頃に出 現し8世紀まで作られていますが、大多数は6世紀後半から7世紀の ものといわれています。白石大谷Ⅰ遺跡の発掘調査報告書がまだ公刊 されていませんので詳しいことわかりませんが、玉湯町の例に近いも のと思います。

宍道町では1基しか発見されていませんが、未発見のものもあると 推定されます。これほどの規模をもつ炭窯が存在することから、近く にたたら製鉄遺構もあると考えられます。古代のたたら製鉄遺構は、 近世のものに比べて極めて簡単な構造のものですが、操業にあたって はかなりの知識や技術を必要としたと思われます。専門の技術者が住 み着いていたのでしょう。

(3) 鉄と鉄器はどんな所でどのようにして生産したか

鉄滓の散布地 前にも紹介しましたように、宍道町内には砂鉄が採れる地層や、鉄滓が散布しているところがあります。鉄滓は、鉄を生産するときや精錬するときにできるカスです。だから、鉄滓の散布地にはたたら製鉄炉や鍛冶炉があった可能性があります。

町内で発掘された製鉄遺構の例がありませんので、詳しいことはわかりませんが、次に発掘されていない遺跡で、鉄滓が散布しているところを紹介しましょう。

[上来待カナクソ谷鈩跡] (図 13-10) 宍道町上来待の梅ノ木 天神の北側に位置する谷を西へ約600メートル進んだところです。カナクソ谷と呼ばれる小さい谷から流出する水路で、鉄滓1点を採集しました。この鉄滓は、磁石にほとんど反応しませんでした。鉄分をほとんど含まないということになります。かなり効率のよい製錬が行われていたのでしょう。遺跡地図で示された部分は、現在道路や水路の工事で元の地形とはかなり変化していて、詳しいことはわかりません

が、おそらくこの小さい谷 の上の方でたたら製鉄が行 われていたのだと思います。

[大野鈩跡] (図13-6)

宍道町大字西来待を通る農道から約200メートル



南に入った部分で鉄滓2点 写真3 カナクソ谷鈩跡推定地(この右谷奥か?)

をみつけました。この鉄滓は、磁石に反応しました。 それだけ、鉄分が含まれているということで、鉄との分離が悪かったということになります。現地は、溜池の東側にあたり、採土が行



写直 4 大野鈩跡

われたところのようです。採取地点東側の丘陵斜面にいくぶんか平坦 なところもありますので、このあたりにたたらが存在するかもしれま せん。

「大畑遺跡」(図13-3)

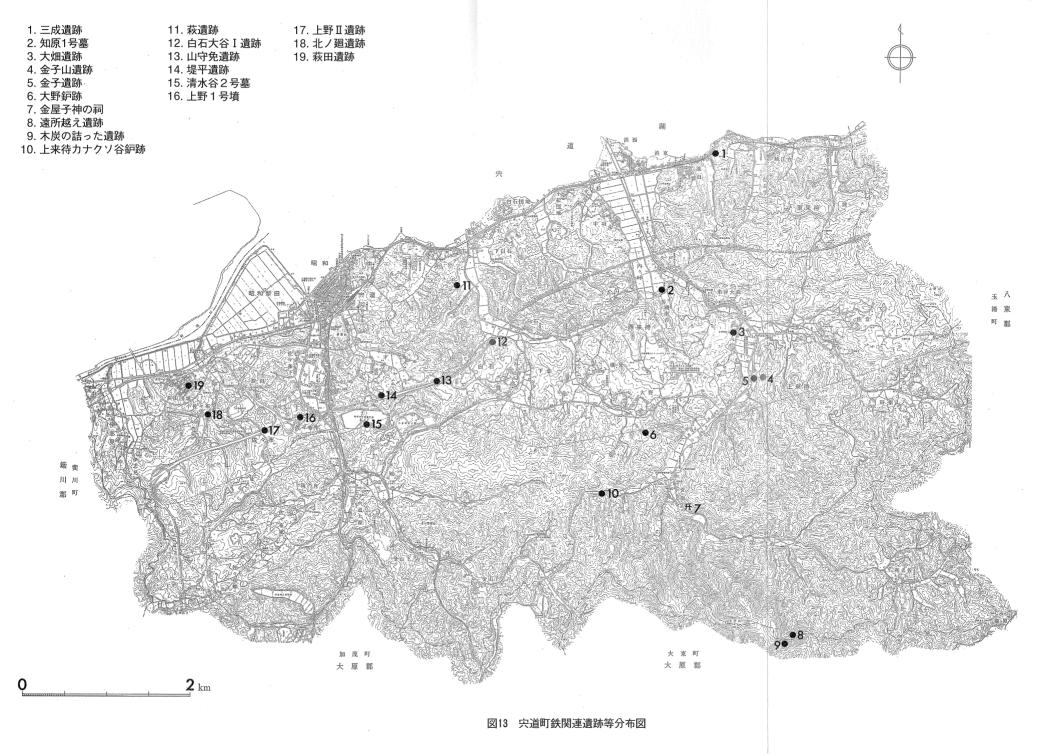
宍道町大字上来待の来 待神社前面に広がる東向き の緩やかな斜面にありま す。参道を中心としたあた りで鉄滓がいくらか散布し ています。ここの鉄滓は、



写真 5 大畑遺跡 (手前の畑部分)

磁石にほとんど反応しませんでした。須恵器や土師器などの土器片も 散布しています。この遺跡は、たたら製鉄跡だとしても、どのあたり にあったか不明ですし、鍛冶遺構の可能性もあります。今後の検討が 必要です。

[金子山遺跡](図13-4) 大畑遺跡の東南東約600メートルの



地点、宍道町大字上来待字金子山にあります。丘陵の中腹にあたり、 県道の通る平地からの比高約20メートル前後の位置にあります。現在 は、丘陵全体が杉林や竹林に覆われていますが、かつては遺跡下方の 斜面に西向きの棚田が開けていました。棚田の痕跡が残っています。 平地から遺跡がよく見えたはずです。

棚田跡最上部の東側奥に、田の跡より $1\sim2$ メートル高い小平坦面があります。この平坦面は、L字状にカットされたものと思われ、その奥は自然の斜面となっています。小平坦面の西側端部に鉄滓があり

ました。おそらく、この平 坦面のどこかにたたら製鉄 跡があると思います。表面 的な観察では、古代から中 世にかけてのある時期のた たら製鉄跡と推定されま す。採集した鉄滓は磁石に ほとんど反応しませんでした。

棚田跡の部分では、奈良 時代以降の須恵器や土師器 の破片、鉄滓などが出土し ているとのことです。この 丘陵の裾部分、来待川右岸 の畑に釜子遺跡(図13-5)



写真6 金子山遺跡(矢印はたたら跡推定部分)

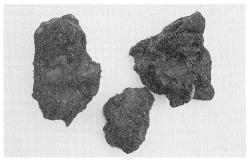


写真7 金子山遺跡採集の鉄滓

があります。棚田跡の遺跡と金子遺跡は同一のものとみた方がよさそうです。棚田跡より下で発見される鉄滓は金子山遺跡から流れ落ちた物でしょう。

「荻遺跡」(図13-11) 宍道町大字首右字下白石を流れる、同道 川左岸の丘陵裾部に位置します。遺跡地図には鉄滓散布の記録があり ますが、筆者が踏査したところでは、発見することができませんでし た。弥生時代から平安時代ころまでの遺物が散布しているようです。 鍛冶遺構でもあったのかもしれません。今後の検討を要します。念の ため記しておきます。

[北ノ廻遺跡](図13-18) 宍道町大字佐ゃ希字小佐々布を流れる、小さな川江尻川右岸の緩やかな斜面に位置します。遺跡地図には、須恵器片、鉄滓散布の記録がありますが、発見できませんでした。これも、今後の検討を要します。念のため記しておきます。

[遠所越え遺跡](図13-8) 大東町との境に位置する八重山山 頂(八重山城跡)から尾根伝いに西南西に約300メートル行った地点

にあります。頂上から約70 メートル下ったところの尾 根からわずかに宍道町寄り の地点です。尾根から、わ ずかばかり下った部分に位 置しています。標高約340 メートルの高い位置にあり



写真8 遠所越え遺跡(たたら跡推定部分)

ます。宍道町側の道では、上来待の雲ケ谷をほば登りきった地点ですが、今は草木が茂っているためこのルートを通って登ることは困難です。

宍道町側から尾根に向かうルートはちょっとした谷になっていて、その谷に面した部分の斜面をL字状にカットしたと思われる平坦面がありますが、草木が生い茂っているので詳しいことはわかりません。平坦面の端部下に鉄滓が散布しています。ここの鉄滓は、磁石にほとんど反応しませんでした。表面的な観察では、金子山遺跡と同じように古代から中世にかけてのある時期のたたら製鉄跡と推定されます。こんな高い位置でたたら製鉄を行った本当の理由はわかりませんが、木炭を近くで得るためだったと推定しています。尾根の南側、大東町側に普通車がかろうじて通ることのできる道がつけられています。その道に沿って、遠所越え遺跡から約50m西の方へ登ると、道沿いの崖面に木炭の詰まった落込み(図13-9)が見られます。きちんと発掘調査をしなければわかりませんが、たたら遺構の地下構造か小炭を焼

いた跡と考えられます。製 鉄か鍛冶に関連する遺構で しょう。こうした遺構が付 近にまだまだ埋もれている と思われます。



以上紹介したのは、今の

写真9 木炭の詰った落込み

ところ中世以前のたたら跡であろうと考えています。近世から近代にいたる高殿たたら(永代たたら、企業たたら)跡が存在したという伝承や記録が全くありませんし、鉄滓散布地の立地等をみてもそのような状況にありません。地名などから近世の野たたら(自給だたら)である可能性も捨て切れませんが、これも今のところ伝承や記録が見当たらないようです。もし、具体的な言い伝え等がありましたら、お教え願います。また、未発見の散布地も多くあると思います。これについても、情報をお寄せ下さい。

鉄器製造の工房 次は、鉄器を製造したと考えられる、これまでに 発掘された遺跡の様子を紹介しましょう。

[上野Ⅱ遺跡](図13-17)中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内の平成11年度調査で発掘された遺跡です。所在地は宍道町大字佐々布字上野で、佐々布川下流部に少しばかり開けた平野へ東向きの小さな谷の南側丘陵上にあります。標高約76メートル前後のところが、約5,100平方メートルの範囲で島根県教育委員会によって発掘されました。調査区の南側高台に上ると、北側前面が開け、西は出雲市方面から東は松江市方面まで眺望のきくところです。調査区の南側には、少し高い位置ですがかなり広い平坦面があり、上野Ⅱ遺跡の続きが存在すると推定されます。大集落があったと考えてよいようです。この地域の拠点集落と考えられます。弥生時代後期の竪穴式建物跡(古墳時代中期の建物跡もあります)を主体とします。掘立て柱建物跡も検出されています。この遺跡は、新聞やテレビでも報道されましたが、先

にもふわたようにたくさん の鉄器が出土して注目を浴 びました。全国的にみても、 弥牛時代の遺跡で、多数の 鉄器を出土したところはそ う多くありません。近畿地 方や四国地方などと比較し てみても、鳥根県での鉄器 出土量の方が多いといわれ ています。なぜ、上野Ⅱ遺 跡でたくさんの鉄器が出土 したか、大変興味深いとこ ろです。 各種鉄器に加え、 铁器未製品、板状鉄素材、 棒状鉄素材、砥石等も出土 しています。板状鉄素材に ついて、新聞記事で「日本 で初めて出土」という表現 もされました。鍛冶滓等は 発見されませんでしたが、 鍛冶炉が検出されていま す。その鍛冶炉は、穴を掘



写真10 上野Ⅱ遺跡発掘初掘調査風景



写真11 上野 Ⅱ 遺跡 8 号堅穴建物跡(板状鉄素材が出土した)

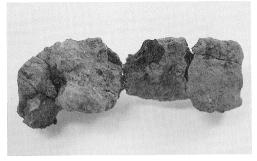


写真12 上野Ⅱ遺跡出土(鉄鍬か)

表 2 上野 II 遺跡の竪穴式建物跡(現地説明会資料より作成)

建物	平面形	規模	時期	主 な 遺 物	特 徴
1	方形	一辺 5.8 m	古墳中期	なし	
2	隅円方形	一辺 5.0 m	弥生後期	鉄器 (鉄器片)	
3	方形	一辺 5.6 m	古墳中期	なし	
5	隅円方形	一辺 5.0 m	弥生後期	甑形土器・鉄器(刀子)	
6	円形	径 8.0m	弥生後期	管玉・鉄器(刀子・鉇・鏃 ・鋳造鉄斧・鉄器片)	鍛冶炉 4、排水 溝
7	不整隅円方形	径 5.0 m	弥生後期	碧玉原石(青めのう)・砥 石・鉄器(鉄器片・未製品)	
8	楕円形	径 5.4 m	弥生後期	鉄器 (刀子の柄・鉄素材・ 銑鉄塊?・鉄器片)	鍛冶炉 2
9	隅円六角形	径 7.8m	弥生後期	鉄器 (未製品又は素材・鉄 器片)	鍛冶炉1
10	楕円形	径 5.4 m	弥生後期	玉	壁際に穴1、鍛 冶炉1
11	円形	径 3.0 m	弥生後期	なし	
12	隅円方形	一辺 5.8 m	弥生後期	鉄器(鉇・鏃又は鏃未製品)	鍛冶炉1
13	方形	一辺 6.2 m	古墳中期	なし	
14	方形	一辺 5.5 m	古墳中期	玉·坏·蓋	盛土した床、壁 際の穴から玉・ 坏・蓋のセット
15	楕円形	径 7.0 m	弥生後期	鉄器(鉄器端切れ)	鍛冶炉 5
16	隅円方形	一辺 6.0 m	弥生後期	なし	焼けて多量の炭 化材が残る
17	方形	一辺 6.0 m	古墳中期	鉄器(錐)	鍛冶炉1

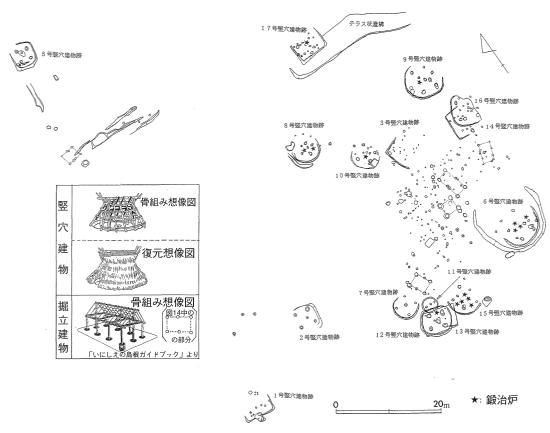


図14 上野Ⅱ遺跡遺構配置図(現地説明会資料より)

って木炭層を何層か詰めた簡単な地下構造をもつものと、そうでない ものがあります。前者はたたらの地下構造と同じように炉の温度を高 めるための工夫と考えられます。鍛冶の目的によって使い分けたので しょう。また、鍛冶炉は検出されませんでしたが、砥石が出土した竪 穴式建物跡があります。鉄器を製造するとき、鉄素材を加熱して、た がねで切ったり、砥石で研いだりして形を整えたのでしょう。遺構や 遺物の検出状況から、鍛冶をする人と、研いだりする人との分業が行 われていたのだろうと、調査を担当した人は話していました。今のと ころ、島根県内で一番古い鉄器製造工房です。

[荻田遺跡](図13-19) 宍道町営住宅団地造成が計画されたため、 宍道町教育委員会によって昭和48年に調査が行われました。所在地は、 宍道町大字佐々布で、宍道湖南西岸にせまる低丘陵の北西側緩斜面に

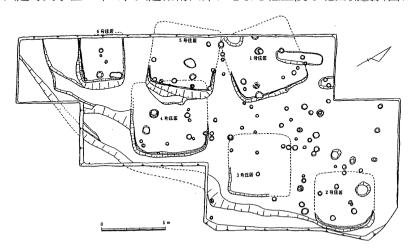


図15 荻田遺跡 住居跡検出状態「県埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」より

ありました。遺跡の前面は、昭和新田と呼ばれているあたりで、大正時代以前は湖の一部です。東海大学情報技術センターによるコンピューター・イメージングー古代の復元ーでは、1200年前の宍道湖の西岸が、今の平田市国宮町から裴川



写真13 荻田遺跡出土鉄滓

町上直江のあたりまできています。遺跡のあたりは、ちょうど古代の ^{ラセま} 駅が置かれたと推定されている地域ですから、この遺跡は駅に関連 する可能性があります。6 軒の住居跡が発見され、 $1 \sim 5$ 号住居跡は 奈良時代、6 号住居跡は古墳時代中期と報告されています。このうち、 4号住居跡周辺から鉄族、鉄滓、砥石、鉄釘が、5号住居跡から須恵 器やふいごの羽口が出土しています。5号住居跡では壁際に接するよ うに、6号住居跡では中央付近には炉跡がありました。ふいごの羽口 は比較的残存のよいものを見ると、残存長10.5センチメートル、最大 径6センチメートル、器壁の厚さ2センチメートル、孔の径2センチ メートルのものです。鉄滓は、碗形滓が多く、鍛練鍛冶が行われてい たと考えられています。5号住居跡は奈良時代と報告されていますが、 その後の検討では、古墳時代後期か奈良時代末から平安時代初の頃か は判断できかねるとのことです。また、4号住居跡の鉄滓と5号住居 跡の炉跡との関係も不明です。しかし、古墳時代後期から平安時代初 にかけてのいずれかの時代に、この遺跡で鍛練鍛冶が行われていたこ とは確実のようです。

[堤平遺跡](図13-14) 中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内の調査で発掘された遺跡です。所在地は宍道町大字白石字堤平で、佐為神社の裏山の北向き斜面にあたります。現在の舟河原溜池の

東側低丘陵の斜面で、北側 前面は小さい谷となってい ます。遺跡は、北東向きの 急斜面の岩盤を幅約20メートル、長さ約40メートルの 範囲を切り崩して造成され ています。この平坦面か



写真14 堤平遺跡発掘調査風景

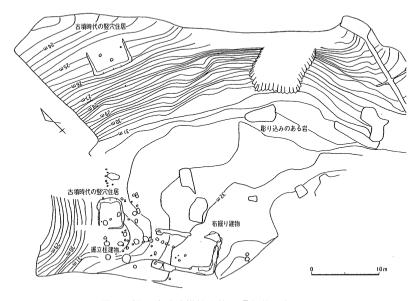


図16 堤平遺跡遺構検出状況「宍道町史」より

ら、掘立柱。建物跡 1 棟、希掘り建物跡 1 棟、柱穴、長方形の彫り込みのある岩盤等が検出されました。出土遺物には、灯明の痕跡(ススが付着)のある皿、文字(口千継?)の刻まれた壺、鉄鉢形土器、銅製容器破片、鉄器、鍛冶滓、羽口、銅滓(炉壁)等があります。瓦はありませんが、奈良時代後半に始まり、平安時代まで続いた古代の寺院跡と考えられます。露出した岩盤に彫り込まれた長方形の孔は、発見当時には板石によって蓋をされていました。答利を収めた舎利孔とも考えられ、小型の木造塔が存在した可能性があります。堤平遺跡は、宍道町内唯一の古代寺院であり、この時期の寺院としては瓦を持たない例として、県内でも数少ない存在です。報告書は未公刊ですが、若干の遺物をみせていただきました。鉄滓は小さいものですが、磁石に反応するものとしないものがあります。羽口は先端部に鉄分が付着しています。寺院で必要な鉄製品や銅製品を製造していたのでしょう。出土した銅製容器や鉄器も、ここで作られていたのでしょうか。僧侶や寺で働く人たちの中には、そういう技術者もいたようです。

上野 II 遺跡のような弥生時代のハイテク集団の存在とか、白石大谷 I 遺跡の炭焼き窯から連想される飛鳥時代~奈良時代の製鉄集団の存在が推定されます。古墳時代の鉄や鉄器生産に関するデータはやや不足しますが、弥生時代から平安時代にいたる間、断続的であるにしても鉄や鉄器生産に係わる集団やその集団を掌握する人物が佐々布から白石のあたりにかけて存在していたと想像できます。さらに想像を逞

しくすることが許されるならば、こうした集団を掌握するある時期の特定の人物は、いつのまにか神格化され、出雲国風土記に登場する猪を追いかけた所造天下大神命 (大穴持命)にすり代ったとか、統合されたなどと考えるのも楽しいかもしれません。でも、あまり根拠のないことばかり空想していると、本質を見失いますし、宍道町歴史叢書3や宍道町史史料編に掲載された論文のように、専門家による研究もありますのでこれくらいで止めておきます。

鉄器の生産が行われはじめたということは、鉄器の使用が普及して、 鉄器のない生活が考えられない状況に近づきつつあるということになります。また、鉄製武器による武装化が進んできたということにもなります。中国の史書で邪馬台国の記述で有名な『魏志倭人伝』に、「も

と百余国に分かれ・・・」とか「もとは 男子を王としたが、七・八十年ほど前、 倭国が乱れ、何年も互いに攻め合った ので、・・・・」という記事があります。 ちょうど、上野 II 遺跡で人々が鉄製工 具をはじめとする鉄器を作っていた時 期や、四隅突出型墳丘墓の築かれた時 期に近いのが興味深いところです。

上野Ⅱ遺跡出土の鉄器や板状鉄素材 等は、科学的な分析がまだ行われてい ませんので軽々しくは言えませんが、

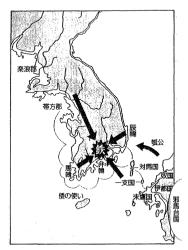


図17 倭韓の交流図 「渡来人登場」(大阪府立弥生博物館)より

鉄鉱石を原料としているのではないかと思います。おそらく韓半島か 中国大陸から輸入したものと思われます。『魏志韓伝』には、「この国 (弁辰のこと) は鉄を産し、韓・濊・倭はそれぞれここから鉄を手に 入れている。物の交易にはすべて鉄を用いて、ちょうど中国で銭を用 いるようであり、…以下略…」とあります。輸入された貴重な材料を 加工する工場がこの高台にあったのです。海外の地と直接貿易するか、 または特定の有力者から輸入品をわけてもらえる人物がいたことは確 かなようです。近畿地方や四国地方よりも多くの鉄器が、鳥取県を含 めた山陰地方で出土することは、弥生時代の人々の交易のようすを暗 示しているように思えます。韓半島で出土する遺物等を詳しく調べる ことによって、交易にともない出雲から輸出したものが明らかになる

かもしれません。少なくとも、縄文時代以 来、大陸特に韓半島との間に人々の交流が あったことは、出土した土器や石器等から 明らかです。島根県隠岐郡五筒村原産の黒 曜石が、遠くシベリアの遺跡から出土して います。また、人類学的な研究では、弥生 時代になると北部九州から島根半島にかけ ての地域で、高顔・ 高身長の「渡来系弥 生人 」がいたことがわかっています。 近年、 松江市の西川津遺跡で発掘された人面付土 器の人面は「渡来系弥生人」をほうふつさ 写真15 西川津遺跡出土人面付土器



甘重す。

話を元に戻しましょう。上野Ⅱ遺跡には国際色豊かなハイテクノロジーを駆使する集団が忙しく働いていたのでしょう。その集団を統率した人は出雲市の西谷 3 号墓のような四隅突出型墳丘墓に葬られた人だったのかもしれません。1967年に発掘調査が行われた宍道町大字東来待字弘長寺の三成遺跡(図13-1)は、古墳時代中期頃の古墳の可能性が高いと報告されていましたが、その後の検討で、弥生時代中期後半から後期前半の小型の墳墓である可能性が指摘されています。小型ながら、四隅突出型墳丘墓の可能性も考えられます。他に弥生時代後期の墳墓として、佐々布の清水谷 2 号墓(図13-15)、東来待の知原 1 号墓(図13-2)があります。案外、未発見の四隅突出型墳丘墓も近くにあるかもしれません。また、上野Ⅱ遺跡の東北東に約250メートルの地点、現在の国道54号線沿いの丘陵上の上野古墳群で、二段築成の大型円墳として注目をあびた上野1号墳(図13-16)が発見されました。この遺跡も、中国横断自動車道尾道松江線の建設予定地内に

あり、1998年の調査で発掘 されました。長径約40メートル、短径約34メートル、 高さ約5メートルの楕円形 墳です。中心主体部には粘 土槨や円筒埴輪転用棺など 3基があり、墳丘裾部にも



写真16 上野1号墳遠景(北西側から)

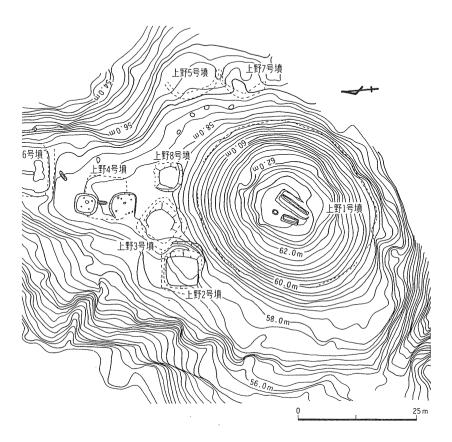


図18 上野古墳群地質測量図「宍道町史」より(部分)

5基の円筒埴輪転用棺がありました。出土遺物には、中心主体の粘土 槨棺内から、日本製の斜縁神獣 鏡 1、勾玉 3、管玉40が、棺外の粘 土中には、鉄剣 2、槍 1 が副葬され、墓壙の上には多数の土器が供え られていました。上野Ⅱ遺跡が栄えた時代より少し後の、古墳時代前 期末に築かれたものです。墳丘の規模、出土遺物の豪華さという点で 目を見張るものがあります。出雲地方の前期古墳は、方墳が主流となりますが、円墳系という点でも特徴があります。今のところ、玉湯町から斐川町にかけて宍道湖岸の前期古墳として最大級のものといえます。かなりの権力を持っていた人物がこの古墳に埋葬されたと考えられます。山陽あるいは奥出雲からの出口となる、交通の要衝を押さえていた人物と考えられます。また、後でふれますが、鉄の他に来待石とか玉類の生産にもかかわった人物なのでしょうか。

(4) 鉄の神様はちょっと変っている

たたらひめの登場 神武天皇の皇后選びに関する物語に、たたらひめが登場します。少し長くなりますが、その部分を紹介しましょう。

『古事記』の中巻では、次のように書かれています。

さて、神武天皇が日向にいらっしゃった時、南多(日向国吾田邑であろうか)の小精君の妹で、名を阿比良比賣という方の間にお生まれになった子に多芸志美美命と次に「岐須美美命の二柱がいらした。しかしながら、さらに皇后となさる乙女をおさがしになられた時に、大久米命が「ここに一人の乙女がおります。この方を神の御子といっています。その神の御子というわけは、三島謹咋(大阪府三島郡地方の豪族か、またはその豪族の祭った神という)の娘で、勢夜陀多良比賣と申す乙女がおりまして、その容姿はたいそう美しいものでした。そのため、三輪(奈良県桜井市にある三輪山)の大物・宣流神(大宮 国主神の別名)がこの娘を見て大変気に入って、その乙女が大便をする時、

赤く塗った矢に姿を変えて、大便をするかわやから流れ下って、その 乙女の陰部を突きました。するとその乙女はびっくりして走りまわり、 あわてふためきました。それからその矢を持ってきて、寝床のそばに 置きますと、矢はたちまち端麗な男となり、やがてその乙女と結婚して生んだ子は、名を富登多多食伊須須岐比賣命といい、またの名を比 賣多多食伊須氣余理比賣と申します。(これはホト「陰部」ということを嫌って、あとで改めた名である。)以上のような事情で神の子と申すのです。」と申し上げた。

第木 卓夫「たたら製鉄と日本刀の科学」雄山閣より抜粋、一部改変『日本書紀』巻第一 神代 上には、次のようなことが書かれています。 大きぎょう (別名大物) 主神、大国主神)があちこちを駆け巡って天下を造り終え、ついに出雲に至り「葦原中国は、もとから荒れて広かった。岩や草木まですべて強かった。しかし、私がくだき伏せて、従わないという者はいない。」と声をあげておっしゃった。・・中略・ その時、不思議な光が海を照らし忽然と浮かんでくるものがあった。「もし、私がいなかったら、お前はどうしてこの国を平定できたか。私がいたから、お前は大きな国を造るというてがらをたてることができたのだ。」とおっしゃった。大己貴神は「お前は何者か」と問われたのに答えて、「私は、お前に幸いをもたらす者である」と答えられました。大己貴神が、「そうです。わかりました。あなたは私に幸いをもたらしてくださる方です。どこに住みたいと思われますか。」と問われたところ、「背景を関の言語がに住みたい。」との返事が

あった。そこで、宮をそこに造って、住まわせられた。これが大三輪の神である。この神の子が姫蹈鞴五十鈴姫命である。また、別の説では、事代主神が、大きい鰐になって三島の玉櫛姫のところに通われた。そして、姫蹈鞴五十鈴姫命を生まれた。これが、神武天皇の言である。

宇治谷 孟「日本書紀(上)全現代語訳」講談社学術文庫より抜粋、改変 『古事記』には勢夜陀多良比賣、富登多多良伊須須岐比賣命またの 名を比賣多多良伊須氣余理比賣が、『日本書紀』には姫踏鞴五十鈴姫 命が登場します。鉄の神様として登場するのではありませんが、たた らという名称や蹈鞴という文字が注目されます。

金屋子神の降臨 全国的に鍛冶、鋳物師、塗繭の神様として古くから信仰を集めている守護神として、稲荷神、荒神、笠屋神の三つの流れがあるといわれます。町や村の鍛冶、鋳物師の守護神は稲荷神、荒神が中心となりますが、山間部のたたら地帯では、金屋神、金屋子神あるいは釜鋳神に変ってくるということです。以下、宍道町でもみられる釜屋子神について述べましょう。金屋子神の降臨譚にはいくらかあります。そのうちの一つに、宿耆国日野郡宮市郷(鳥取県日野郡江府町か)の下原重仲が、宝幡年中より書き始め天明4年(1784)に書き上げた『鐵山秘書』の「金屋子神祭文 雲州非田ノ傳」に収められたものがあります。一部を紹介しましょう。

七月七日の申のさかりの刻に、播磨国志相郡岩鍋(兵庫県宍粟郡千草町)に一神が天降りました。そして、神託していわれるには、「わ

れはこれ金の神金屋子神である。今よりあらゆる金器をつくり、悪魔降服、民安全、五穀豊穣のことを教えよう」と。かくして磐をもって鍋をつくりたまうた。故にこの地を岩鍋という。だが、ここには住みたまうべき山がなかった。そこで、「われは西方を司る神なれば西方に赴かん」といって、白鷺に乗って西国に赴き、出雲国能義郡黒田の奥非田(此前)の山林に着きたまい、「桂・木の森に羽を休めていられたところ、たまたま狩に出ていた安部氏の祖、正重なるものがこれを発見し、やがて神託により、長田兵部朝日長者なるものが宮居を建立し、神主に正重を任じ、神はみずから村下となりたまい、朝日長者は炭と粉鉄(砂鉄)とを集めて吹きたまえば、神通力の致すところ、鉄の湧くこと限りなし。・・以下略・・

石塚 尊俊「鑪と刳舟」慶友社より抜粋、一部改変 ここに登場する宮居である金屋子神社は、島根県能義郡広瀬町大字 西比田字黒田にあります。何時の時代までさかのぼれるかわかりませ んが、近世初頭頃においては、かなり知られるようになっていたよう

です。少し時代が下ってから非常な発展をとげ、各地に分祠されるようになりました。中国山地のたたら地帯では、金屋子神といえば比田だというほどになっていたそうです。降臨の地に



写真17 金屋子神社(能義広瀬町西比田)

ついて、「金山姫宮縁起」では、奥州岩狭郡信夫庄(福島県安達郡北部と伊達郡西部あたりか)へ降臨、そこから備中の中山を経て、比田へ降りられたとなっています。島根県飯石郡吉田村菅谷雄での伝承では、神はどこよりも先に備中の中山(岡山県津山市中山神社付近)に降りられたということです。伯耆日野郡の山間部では、現在の首節町の前賀へも寄っていかれたとなっています。金屋子神祭文では、白鷺に乗って降臨されたとなっていますが、白狐に乗って降りられたという言い伝えも広くあります。菅谷鑪などでも「神は白狐に乗っておりられた。そのため、四つ目の犬が吠えかかった。」と伝えられているそうです。

神様の好き嫌い 金屋子神は、女性の神様と信じられています。あまり容姿に自信がなかったので、人間の女、特に美人は嫌いであるといわれています。そのため、たたらの操業にあたって、タブーがたくさんありました。犬や蒼も嫌っていたようです。「むかし、金屋子さんが青備の中山という所へ天降らっしゃったとき、四つ目の犬が吠えかかった。そこで金屋子さんは蔦にさばって逃げようとされたが、蔦が切れたために犬に咬まれて死んでしまわれた。それで金屋子さんは犬と蔦が嫌いである。」という言い伝えが、鳥取県日野郡日南町多里で採話されています。蔦は切れたけれど藤につかまって助かったとか、麻苧に絡まって倒れ死んだとか、土地によって内容がいくぶんか異なりますが、金屋子神に関する話が他にもいくらかあります。金屋子神は、死と屍は嫌わなくて、たたらの押立柱に死屍をくくりつけてお

いてもよかったそうです。鉄がうまくできないとき、死人を負って歩けばよいとさえいわれたようです。ちょうどそのことを証明する次のような言い伝えが簸川郡で採話されています。「むかし、金屋子さんが旅をしていて日が暮れ、ある一軒の家へ宿を乞われた。そうしたら、その家ではちょうど産があったために断られた。しかたなく次の家へ行かれると、そこでは死人があったが、こころよく泊めてくれた。それで金屋子さんは産が嫌いで死がすきだという。」

こうした金屋子信仰は、それだけ、たたら操業が重要で高い技術を要し、かつ重労働をともなう仕事であり、身命を賭して臨まなければならなかったためと思われます。現代では、考えられない非科学的なことや女性蔑視につながることが信じられ、その禁忌を守っていたのでした。現在のたたら操業でも金屋子信仰は続けられていますが、このようなことはもちろん行われていません。

金屋子神は、なぜ女神なのか色々わけがありそうですが、次に紹介することは興味深いと思います。

「たたら」という名称が、 『古事記』や『日本書紀』 に女性の名前で現われます。 『古事記』に、神武天皇の 『古事記』に、神武天皇の 『言。勢夜多陀多良比賣と、 その御子富登多多良伊須須 岐比賣命の名前がありまし



写真18 村下がホド穴を観察しているところ(日 刀保たたら)

た。御子には、「富・登」という名称がついています。女性の陰部を意味しますが、この名称は今のたたらにも残っています。砂鉄と木炭を投入して鉄のかたまりをつくる箱形炉の底部に近い穴をホド穴といい、ふいごから風を送る木 含管を押し込む穴です。ホド穴は送風のためだけでなく、鉄のできぐあいを観察する穴でもあります。状態の悪い時はホド突きという道具を挿入して、半溶融の鉱滓を除去するなどして適正な通風をはかります。たたらとホト、女性の関係は古くからあったようです。だから、金屋子神は女神なのでしょうか。

石塚尊俊氏は、その著書「鑪と刳舟」で、以上のことに着目されながら別の項では、金屋子神降臨譚の登場人物と記・紀・風土記の説話の関連等から、次のように説かれています。「金屋子神は通常には女神とされている。だが、それはこれを祀るものが女であったからで、もとは若々しい男神であった。それは火の神であり、日の神であって、時には雷の形をもって降臨せられた。・・・・以下略・・・・」

宍道町内にも金屋子神を祭る祠(図13-7)があり、カナヤゴの地

名が残されているところも あります。地名として残さ れているところは、たたら 製鉄、鍛冶、炭焼が行われ た所だと思われます。



写真19 上来待菅原の金屋子神を祭る祠

V おわりに

主として、弥生時代から平安時代にいたる間の鉄と鉄器の生産について述べました。宍道町内ではたたら製鉄遺構が発掘されていないため、やや迫力の欠ける内容となりましたが、おおよそのことはご理解いただけたと思います。

人との係わりの歴史を考えると、『出雲国風土記』 養子郡の執筆責任者の一人であった 林 覧 の存在が気になります。また、古代の宍道に想いを寄せると、鉄ばかりでなく来待石や玉湯町の花 値 で採れるめのうも気になります。鉄とともに、来待石、玉類の生産は古代出雲の重要な産業であったと思います。少なくとも、 精志郷 一 宍道郷のあたりでは基幹産業であったといってもよいでしょう。鉄が登場して後は、鉄器が石の加工には欠かせないものとなります。来待石や玉類の生産を管理する人が、鉄を支配する人物と同一である可能性も考えられます。

来待石については「来待石の採石と加工」、「宍道町が海だったころ」、「宍道町の古墳時代」、「石と人」などの宍道町ふるさと文庫シリーズや宍道町歴史叢書1、宍道町史等で色々と説明されていますので、よくご承知の方も多いかと思います。来待石が古墳の石棺や石室の材料として用いられ、宍道町内の古墳や横穴墓ばかりでなく、玉湯町や松江市の横穴墓からも来待石製の石棺が出土しています。それだけ、古い時代から利用され、当時の宍道の特産物だったといえます。

花仙山(『出雲国風土記』では玉作山)で採れるめのうには、青め

のう(以下 類玉) と赤めのう(以下、めのう)があります。碧玉 け出雪石ともいいます。古くから、碧玉やめのうを利用して勾玉や管 玉などの玉類がつくられてきました。1976年の発掘調査で、松江市矢 田町の平所遺跡から、弥牛時代後期の玉作工房跡が検出されました。 水晶を主な材料としていますが、碧玉やめのうも使われていることが わかりました。原石を加工するための鉄器多数も出土しています。玉 の生産者と鉄器の生産者との間には密接な関係があったと考えること も可能です。また、1995年に行われた、安来市荒島町の柳 遺跡の調 **香では、弥生時代後期の遺構から玉作関係の遺物と考えられる碧玉の** 剥片が出土しています。この剥片を蛍光X線分析法という科学的分析 を行った結果、花仙山原産であることがわかりました。今のところ、 花仙山原産と科学的に確認されたものしては最も古いものです。直接、 玉とは結びつきませんが、この柳遺跡の弥生時代の遺構からも多数の 鉄器が出土しています。上野Ⅱ遺跡の7号竪穴建物跡でも碧玉原石が 出土しています。どんな目的で持っていたのかわかりませんが、鉄器 (鉄器片・未製品) や砥石とともに出土しています。これも花仙山の ものでしょう。古墳時代前期になると、全国の主要古墳で、出雲産の 碧玉でつくられた玉類が副葬されるようになります。中期には出雲の 各地で玉作りが行われるようになります。また、全国的にも玉作りが 盛んになりました。ところが、後期になると、全国の主要古墳で副葬 品に金銅製品が用いられるようになり、石製の玉類は消えていきます。 全国的に玉作り遺跡の数が減っていきます。しかし、出雲では全国的 な傾向とは異なり、花仙山を中心とした地域で玉生産が続けられています。だから、古墳時代後期の全国の中小の古墳から出土する碧玉やめのう製の玉類は、出雲産の可能性が高いといわれています。奈良時代以降になると、出雲、それも花仙山周辺でしか玉作り遺跡が発見されていません。『出雲国風土記』(733年)、『出雲国計会帳』(734年)、『古語 拾遺』(807年)、『延喜式』(927年)などの文献をみると、当時出雲で玉作りをしていたことがわかります。

花仙山を中心とした地域は、『出雲国風土記』では烹部神戸といわれ、その西隣りが拝志郷です。現在の宍道町の来待地区は、当時の拝志郷に含まれます。ほぼ全国的な範囲を交易の相手としていた玉作集団の指導者はだれだったでしょう。先にふれました林臣は意宇郡の都一であり実力者でした。林臣かその一族が玉作集団を指導していたのでしょうか。玉作だけでなく、鉄や来待石の生産も掌握していたのでしょうか。『大税賑給帳』(780年)によると、出雲に林姓が多かったようです。それにしても、林臣と拝志郷の関係が気になります。上野1号墳に埋葬された人物は、林氏の祖先の一人だったのでしょうか。

考古学では、遺構や遺物を中心に考えますので、人々の生活が見え にくい面もありますが、遺構や遺物は人の生活の痕跡ですから、よく 観察すると、当時の人々の息遣いが聞こえてくるような気がします。

私たちの生活している土地には、断片的ですが、古い時代からの色々な情報(メッセージ)が伝えられています。その情報をいかに収集して、どのように組み立てるかによって、描かれる歴史は異なります。

情報には色々な形のものがあります。入手しやすいものとしては、遺跡や遺物、文字や絵などで表された記録、言い伝えが主なものでしょう。歴史を描くには、自分で集めた情報を分析し順序よくまとめて表現すればよいのです。その時に、自分の都合のよいように勝手に解釈したのでは、正しい歴史を語ることはできません。集めた情報を類似のものと比較検討したり、科学的な方法を取り入れたり、広く日本全体の動向や世界史との関連を考慮することが必要です。

私は、情報を科学的に捉えて、正しい歴史を復元しようと努力していますが、今回は、あまり根拠のないことも少し想像して書いてみました。そうすることによって、思考の範囲を広げてみようと思ったからです。宍道町の鉄の歴史についての研究は始まったばかりで、まだまだ不明なことばかりです。今後も研究を続けたいと思います。町内には、まだ多くのたたら製鉄跡が存在するはずです。存在を明らかにすることが研究の第一歩です。鉄滓の散布しているところをさがせばよいのですが、山野を踏査しても樹木が生い茂っているところが多く、簡単に発見することができません。本文中にも書きましたが、鉄滓の散布しているところなどの情報をお教え下さい。

本書の執筆にあたっては、町内外の多数の方々からご指導とご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

金屋子神に関する内容については、主として石塚尊俊著「鑪と刳舟」 慶友社を引用して、若干の私見を加えながら記述しました。

用語解説

駅 奈良時代、畿内と地方を結ぶ駅路が整備されていた。三十里(16km) ごとに駅家が置かれ、公用の馬が配置されていた。古代山陰道は、都から石見国にいたるものである。『出雲国風土記』に「玉作街より西へ九里(4.8km)で来待橋に行き着く。長さは八丈(23.6 m)、広さは一丈三尺(3.9 m)ある。また、西へ十四里三十歩(7.54km)で郡の西の境である佐雑埼に着く。また、西へ十三里(7.1km)で出雲郡家に着く。…」とある。

押立柱 高殿たたらの大屋根を支える四本柱のことで、おおむね地下構造部分の周囲に建てられる。

企業たたら 製品の量産を計り販売することを目的とした、たたらのことである。中世以降のもので、初期企業たたら、近世企業たたらに分類される。 高橋一郎氏の提唱による。一般に、近世の大掛りのものは永代たたら、高殿たたらと呼ばれる。

郡家 古代官衙のひとつで、国庁のもとに置かれた郡庁。出雲国飯石郡の場合、現在の掛合町郡に置かれたと推定されている。出雲国意宇郡の場合は、出雲国庁(現在の松江市大草町)と同所に置かれた。

蛍光X線分析 X線を用いて遺物に含まれる成分等を科学的に調べる方法。石器原料の産地、土器の製造地、金属器の成分を調べるのに便利。遺物等の資料をまったく損傷しないで分析できるのが特徴。

鉧 還元鉄のこと。たたら製鉄炉の底に、直接鋼を生産する押 (けらおし) 法によってつくられた大きな鉄塊。銑鉄(ずくてつ)は、銑押(ずくおし) 法によってつくられる。

金銅 銅に鍍金したもの。古墳時代中期頃より武具、馬具などにこの技法が用いられた。

自給たたら 一般に野だたらと呼ばれている。自家消費量程度の少量を生産するたたらのこと。高橋一郎氏の提唱による。

舎利孔 仏教寺院の塔心礎にあけられた穴のこと。

製錬 鉱石その他の原料から含石金属を分離・抽出して金属をつくること。本稿では、砂鉄や鉄鉱石を原料とした製鉄のこと。

精錬 本稿では、生成された鉄塊を精製し不純物を取り除くことをいう。 高殿たたら 内部に製鉄炉が築かれ 天秤鞴 砂鉄置場 木炭置場 釜土

置場、休憩所が配置された建物を高殿という。高殿をもつたたら場のことであり、永代たたらとも呼んだ。

鍛造 火床に鉄塊を装入し、ふいごで風を送って灼熱させ、鍛打すること によって不純物を絞り出したり成形したりすること。

鍛造剥片、粒状滓 鉄を鍛え製品に加工する際の、鍛打で飛び散る微小な 皮膜状の不純物片を鍛造剥片、微小な粒状の不純物片を粒状滓という。鍛冶 跡の発掘調査では、こうした遺物の採取に努める。

鉄滓 鉄を製錬したり、鍛錬加工する際に発生する溶滓を鉄滓と呼んでいる。砂鉄や鉱石に含まれる成分、炉壁の成分、混合物の成分が融解して出て くる。大別して、製錬滓、鍛冶滓、鋳物滓に分類できる。

地磁気年代測定 地磁気の方向は、時代により変化している。土、粘土には磁鉄鉱、赤鉄鉱など磁気をおびやすいものがふくまれ、これが高温で熱せられたり、(柔軟性に富み可塑性のある地盤の場合)強い衝撃劇を受けたりすると、そのときの磁力線の方向が永久に固定される。この性質を利用して、磁力線の固定された年代を測定する。

渡来系弥生人 「北部九州・山口」、「西北九州」、「南九州」地域で大量に 弥生人骨が出土している。これらを分類すると、「北部九州・山口」タイプ は顔の高さが高く(長く)、身長も高く、顔のホリが浅い。「西北九州」タイ プは顔の高さは低く、横幅が広く(低・広顔)、低身長で鼻が高く、ホリが深い。「南九州・離島」タイプは顔が小さく、「西北九州」タイプ以上に低・広顔傾向が強く、頭を上からみた形が円に近く(短頭型)、著しく低身長である。「西北九州」タイプと「南九州・離島」タイプの弥生人は、縄文人の子孫と考えられるが、「北部九州・山口」タイプの弥生人は大陸からの渡来人かその子孫と推定されている。

羽口 金属の製錬炉や精錬炉等に風を送るための送風口をいう。

ふいご 踏鞴、鞴、吹子の字をあてることが多い。炉への送風装置のことで、羽口につないで用いる。踏みふいご、吹き差しふいご、天秤ふいごなどがある。

放射性炭素 C14年代測定 木炭や貝殻などに含まれる放射性炭素 C14は 5730 ± 40 年で半減するので、これを利用して年代を測定する方法。一般的には、1950年を基準にして B.P. (1950年より何年前かという意味) で示される。本稿では、西暦に換算してある。

墓壙 古墳などで、遺体を埋葬するために掘られた竪穴のことで、木棺や 石棺が納められる

村下 たたら操業の責任者であり、表村下と裏村下の2名で担当した。

四隅突出型墳丘墓 方形の墳丘の四隅が突出する形の墳墓。その平面的形状から名づけられた。鳥取県中部から島根県出雲市あたりにかけた地域で多くみられる。中国山地にもみられ、日本海側では、遠く北陸地方でもかなり発見されている。

碗形滓 精錬鍛冶炉の底に堆積形成される鍛冶滓をいう。

参考にした主な文献

石塚尊俊「鑪と刳舟」慶友社(1996年10月10日)

池田満雄他「宍道町ふるさと文庫8 石と人」宍道町教育委員会(1995年3 月31日)

大阪府立弥生博物館「平成11年春季特別展 渡来人登場--弥生文化を開いた 人々-- (1999年4月17日)

角田徳幸「山陰における古代・中世の鉄生産」田中義昭先生退官記念文集『地域に根ざして』(1999年3月)

勝部昭・伊藤慶幸「宍道町ふるさと文庫12 古代の道・現代の道」宍道町教育委員会(1997年3月31日)

加藤義成「校注 出雲国風土記」千鳥書房(1958年9月1日)

加藤義成「修訂 出雲国風土記参究」今井書店(1981年5月1日)

川越哲志「鉄生産と土器製塩」『新版 古代の日本④中国・四国』角川書店 (1992年1月20日)

河瀬正利「たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究」渓水社(1995年2月 25日)

窪田蔵郎「シルクロード鉄物語」雄山閣(1955年7月20日)

窪田蔵郎「図説日本の文化をさぐる7 鉄の文化」小峰書店(1990年4月10日)

窪田蔵郎「考古学ライブラリー15 製鉄遺跡」ニュー・サイエンス社(1983年8月30日)

黒田祐一「宍道町史史料集(地名編)」宍道町教育委員会(1995年3月31日) 島津邦弘「山陽・山陰鉄学の旅」中国新聞社(1994年3月25日) 島根県教育委員会「いにしえの島根ガイドブック」(1996年3月31日)

4月26日)

社団法人日本鉄鋼協会「たたら製鉄の復元とそのについて たたら製鉄復元 計画委員会報告」(1971年2月27日)

实道町教育委員会「实道町遺跡地図」(1993年3月31日)

宍道町史編纂委員会「宍道町史 史料編|宍道町(1999年7月1日)

鈴木卓夫「たたら製鉄と日本刀の科学」雄山閣(1990年7月20日)

高橋一郎「奥出雲文庫3奥出雲横田とたたら」奥出雲文庫(1990年1月15日) 高安克己「宍道町ふるさと文庫4 宍道町が海だったころ」宍道町教育委員 会(1991年3月31日)

俵國一「古来の砂鐵製錬法」丸善株式会社(1933年10月1日)

西尾克己他「宍道町ふるさと文庫13 出雲国風土記にみる宍道町」宍道町教育委員会(1998年3月25日)

広島大学文学部考古学研究室「中国地方製鉄遺跡の研究」渓水社(1993年 2 月25日)

村上恭通「シリーズ日本史のなかの考古学 倭人と鉄の考古学」青木書店 (1998年9月25日)

以上の文献以外に、各種遺跡発掘調査報告書多数がありますが、省略します。





著 者 紹 介

石井 悠(いしい はるか)

1945年2月11日生まれ

1967年 島根大学教育学部中学課程卒業

現·宍道中学校教頭

主な著作 東出雲町誌(共著) 竹矢郷土誌(共著) 風土記時代の考古学「出雲国風土記の

巻 |(共著)

宍道町ふるさと文庫14

鉄 と 人

平成12年3月31日印刷

編 著 石 井 悠

発 行 宍道町教育委員会、宍道町蒐古館

八東郡宍道町大字宍道1715-2

印刷 柏木印刷株式会社 松江市国屋町452-2

